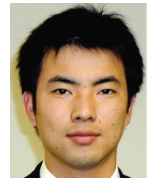


アジアの水辺環境情報ネットワークに関する国際会議



技術普及部 副参事 山口 将文

1. 開催の経緯

近年、都市域の開発により失われた自然環境を河川に求める気運が高まり、世界各地において河川・流域の環境保全、再生に向けた活動や研究が実施されている。その様な状況において、より効率的かつ効果的な環境整備等の活動を実施には、国内外において先進的事例等の情報交換を行い知識の共有を図ることが有効であると考えられる。そのため、当財団では平成16年度より東アジアを中心としたアジア地域における情報交換のためのネットワーク構築を推進している。

これまでにアジアを中心に欧米からの参加者も交え、議論を行い、インターネットと人的交流の2つの方法よりなる情報ネットワークの構築を促進することが決定した。下図は、その体制の概要を示すものである。



図 Asian River Restoration Network体制概要

平成17年10月28日に開催された『アジアの水辺環境情報ネットワークに関する国際会議（以後、会議という）』は、前日の『水辺・流域再生に関わる国際フォーラム』に参加した世界各地の河川水辺の再生復元に携わる実務者による討議の場として設けられた。会議は、実務者の観点からみた国際ネットワークの意義、効果等の意見交換を目的として開催された。会議は金沢大学の玉井教授を座長とし、アジアからは中国、韓国、フィリピン、マレーシアが参加した他、アメリカ及びイタリアからも参加を得た。

2. 会議での主要意見

会議では、今後ネットワークを構築するための運営、戦略等の具体的な方法に関する活発な意見交換が行われた。

当会議において得られた主な意見を以下に示す。

- ・ アジアは、対象域が広く、地域により文化、経済等条件が異なるため、ネットワークは区域を絞って運営を行う。その地理的な境界は、初期段階においては気候の類似した地域とするべきである。
- ・ 河川に留まらず、湿地等流域内の水域の情報の交換を行うべきである。
- ・ アジアは文化、体制等が各国により多種多様なので、ネットワーク参加者が意見交換を行い、その意見を反映させる成長的なネットワークの構築を行う。そのためには、3年間の準備期間を設定し、参加者も意欲のある者、構築に貢献できる者等に広く解放すべきである。また、各国とも少人数のグループによる検討を行い、段階的に大きくしていくのが良い。少人数で目的を明確にしておくと比較的やりやすい。
- ・ 目的と時間のフレームを基に検討を進め、来年3月開催予定の第4回世界水フォーラムの場でもネットワークのPRに努めるべきである。

3. 今後の戦略

上記の意見を踏まえ、以下のような戦略が示された。

- ・ 河川の自然再生のためのネットワークを『Asian River Restoration Network (ARRN)』と命名し、設立に向けた活動を継続して行う。
- ・ ネットワークの組織体制は自由度を持たせることが重要である。
- ・ ネットワーク構築には各国政府の支援があることが好ましく、今後各国毎に政府を含めた設立に向けた活動を行う。